

平成16年度試験研究成果書

区分	指導	題名	窒素濃度の高い堆肥を用いたキャベツ、スイートコーン50%減化学肥料栽培技術	
[要約] キャベツ、スイートコーンにおいて、乾物窒素濃度が2%前後～3%前後の堆肥を見かけの窒素利用率を20～40%と推定して、化学肥料の50%を代替施用することで、慣行並の収量を得ることができる。				
キーワード	堆肥	キャベツ、スイートコーン	減化学肥料	生産環境部土壌作物栄養研究室

1 背景とねらい

消費者の食に対する安全・安心への関心が高まっている中で注目されている特別栽培農産物では、化学肥料由来窒素の投入量を慣行の1/2以下にする必要があり、有機物による化学肥料の代替が重要な技術となる。化学肥料に近い肥効を持つ有機質肥料を用いた減化学肥料栽培については、すでに実用化されているが、県内で多く生産されている牛ふんを主体にした堆肥は、窒素成分の低さと緩やかな肥効特性から、化学肥料の代替資材とはならなかった。しかし、家畜排泄物法を発端として、県内各地に堆肥センターが設置され、これまでよりも窒素濃度の高い堆肥が生産されるようになった。そこで、キャベツ、スイートコーンを対象として、窒素濃度の高い堆肥を用いた化学肥料代替技術について検討した。

2 成果の内容

- (1) 平成4年度の成果に基づき、堆肥乾物中の窒素濃度と見かけの窒素利用率を下表のとおりとし、化学肥料中窒素の50%を堆肥で代替することで、慣行並の収量を得ることができる（図1）。

作物	乾物窒素濃度(%)			
	1.8%未満	1.8%以上～ 2.7%未満	2.7%以上～ 3.5%未満	3.5%以上
春まき夏どりキャベツ	減化学肥料栽培への 利用不可	30	40	100
スイートコーン		20		
夏まき秋どりキャベツ		30		

- (2) 堆肥から十分な量のリン酸とカリが供給されることから、化学肥料は窒素のみの施肥とする（表1）

- (3) 化学肥料50%を堆肥で代替するための堆肥現物施用量は、以下の方法で算出する。

$$(100 \div \text{乾物窒素濃度}(\%))_{(\text{kg})} \times (\text{慣行窒素施肥量} \div 2)_{(\text{kg}/10\text{a})} (100 \div (100 - \text{堆肥の水分}))_{(\%)} \times (100 \div \text{見かけの窒素利用率}) = \text{現物施用量}(\text{kg}/10\text{a})$$

3 成果活用上の留意事項

- 本技術では、高窒素濃度の堆肥を基肥として施用しており、土づくりのための堆肥は、別途施用する。
- 基肥として施用する高窒素濃度堆肥は、播種・定植の3日～7日前に施用する。
- 堆肥の投入量が慣行より過大となり、土壌中養分の蓄積が懸念されることから、毎年土壌診断を行って、本技術利用の可否を判断する。
- 本技術で言う見かけの窒素利用率とは、堆肥と化学肥料を併用した場合の見かけの利用率であり、本来の堆肥からの窒素供給量や利用率ではないので注意すること。

4 成果の活用方法等

(1) 適用地帯又は対象者等

適用地帯：県下全域

(2) 期待する活用効果

地域の堆肥センターから生産される堆肥（資源）を積極的に利用した50%減化学肥料栽培が可能となる。

5 当該事項に係る試験研究課題

- (522)家畜排泄物等の有機物資源を活用した特別栽培農産物生産技術体系の確立
 (4000)岩手県内生産主要堆肥の成分特性に基づく化学肥料代替使用法の確立
 (H14～H16)

6 参考資料・文献

- (1) 有機物の C/N 比簡易推定法と畑土壌での窒素放出特性 (平成 4 年度普及奨励事項および指導上の参考事項 岩手県農政部)
 (2) 県内堆肥センター産堆肥を用いた主要水稲 50%減化学肥料栽培の可能性 (平成 15 年度研究成果)

7 試験成績の概要 (具体的なデータ)

表 1 50%減化学肥料栽培の施用量 (例)

	見かけの窒素利用率(%)	堆肥成分量(乾物)			堆肥施用量(kg/10a)	堆肥由来の窒素量(kg/10a)	化肥施用量(kg/10a)		堆肥由来のリン酸量(kg/10a)	堆肥由来のカリ量(kg/10a)	
		窒素(%)	リン酸(%)	カリ(%)			基肥	追肥			
キャベツ	化学肥料				0	0	12	6	0	0	
	堆肥A	20	2.1	3.2	2.8	3346	45	3	6	70	62
		30	2.1	3.2	2.8	2230	30	3	6	47	41
	堆肥B	20	3.1	4.3	3.4	2031	45	3	6	63	50
	40	3.1	4.3	3.4	1016	23	3	6	32	25	
スイートコーン	化学肥料				0	0	20	10	0	0	
	堆肥A	20	2.1	3.2	2.8	3717	50	5	10	77	68
	堆肥B	20	3.1	4.3	3.4	2257	50	5	10	70	55

土づくりとして、前年秋に牛ふん堆肥を 2000kg/10a 施用した。

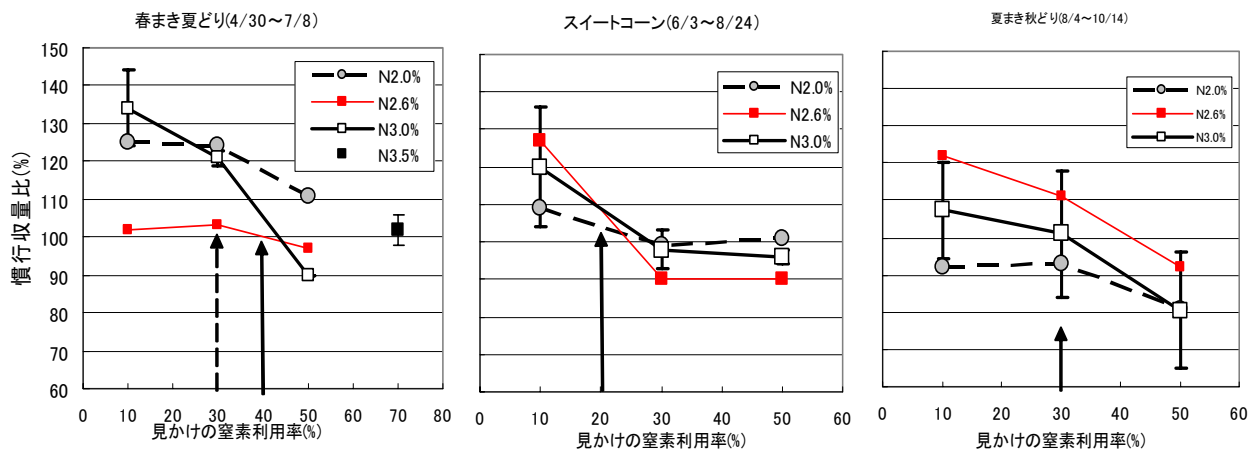


図 1 見かけの窒素利用率と慣行収量比 (北上、住田)

- 慣行区調整重(g/株)は、989(H15 北上)、1153(H16 住田)、1104(H16 北上)であった。
- 凡例「N2.0%」は、「乾物窒素濃度が2%の堆肥」を意味する。